

災厄時における公民館の利用実態に関する分析

熊本大学大学院 学生会員 ○松田崇志 熊本大学 正会員 田中尚人

1. はじめに

我が国は、少子高齢化、人口減少、グローバル化の進展など大きな変革の中にあり、地域社会においても人と人とのつながりの希薄化による社会的孤立の拡大等様々な社会課題に直面している。

今後より多様で複雑化する課題と向き合いながら、一人一人がより豊かな人生を送ることのできる持続可能な社会づくりを進めるため、社会教育¹⁾が注目されている。公民館は地域の社会教育施設として、行政のみならず地域住民など様々な主体がそれぞれの立場から主体的に取り組むことが必要となる²⁾。

地域防災の観点においても、自助共助の必要性が求められており、再度、地域の憩いの場としての公民館についてその実態の整理が必要であると考え。

本研究の目的は、災厄時における公民館の利用実態及びその要因を明らかにすることである。そのため、厄災時における公民館の利用について時系列的に分析し、その変遷を捉えた。また、日常・非日常の両面で公民館に求められる機能について考察した。

2. 研究の概要

(1) 対象地概要

本研究では、熊本県熊本市南区力合校区及び力合西校区を対象地とし、校区内にある全公民館を対象とした。本調査対象範囲は、熊本市の市街地に属しており、人口16,249人の地方都市にある校区である。元来一つの校区であったが、2014年の分校設立により二つに線分された地域であり、それぞれが異なる課題を抱えている。力合校区では高齢化による地域人材の不足。力合西校区では、移住者の増加による地域のまとまりの低下、地域活動の減少という課題を抱えている。現代の地方都市にみられるまちづくりにおける異なる課題を考慮しつつ、災厄時における社会教育の場づくりの実態について調査を行った。



図-1 対象地概要図

(2) 調査手法

災厄時を含めた各地区の公民館の利用実態を明らかにするために、各公民館管理者及び利用者に対してヒアリング調査を行った。得られた調査結果を時系列的に分析し、その変遷を捉えた。また、日常・非日常を含めた公民館に求められる機能を考察した。

3. 災厄時を含めた公民館の利用実態

本章では、災厄時を含めた各地区の公民館の利用変遷を明らかにするために、管理者及び利用者に対してヒアリング調査を行った。得られた調査結果を各地区の空間・活動要素(場の設え、管理運営方法)及び利用者要素(利用者の使い方、公民館へのイメージ)に着目して整理した。

(1) ヒアリング調査の概要

ヒアリング調査では、各地区の社会教育の場を調査対象として、施設管理者及び社会教育の場の利用者のうち「積極的に」公民館を利用している利用者1~3名を対象とし調査を行った。ヒアリング内容としては、熊本地震以前からコロナ禍までの活動での変遷について調査を行った。調査対象地区及び施設については表-1に記した。

表-1 ヒアリング対象地区及び施設

校区	地区名	施設名	設置・運営主体	公民館形態
力合	力合	力合校区公民館	—	校区
	力合コミセン	力合コミュニティセンター	公設民営	—
	島町	島町公民館	民設民営	地区
	刈草町	刈草町公民館	民設民営	地区
	白藤町	白藤町公民館	民設民営	地区
	合志	合志町公民館	民設民営	地区
	白藤ニュータウン	白藤ニュータウン公民館	民設民営	地区
	白藤団地	白藤団地公民館	民設民営	地区
力合西	力合西	力合西校区公民館	—	校区
	薄場	薄場町公民館	民設民営	地区
	島町北	島町第二公民館	民設民営	地区
	野口町	野口町公民館	民設民営	地区
	荒尾町	荒尾町公民館	民設民営	地区
	鷹町	鷹町公民館	民設民営	地区
	野口町	野口老人憩いの家	—	—

(2) 各地区における空間・活動要素の変遷

熊本地震以前からコロナ禍までの空間及び活動要素での変遷について整理した。

(3) 各地区における利用者要素の変遷

熊本地震以前からコロナ禍までの利用者要素での変遷について整理した。

(4) 公民館における利用実態の整理

各公民館について①公民館の設え、②管理者実態、③利用者実態に分類し、災厄時を含めた公民館の利用実態の整理を行った。

4. 災厄時における公民館の利用実態の分析

災厄時における公民館の利用実態の変化について明らかにするために、公民館の特徴や構造の分析及び災厄時を経ての変化について分析した。

表-2 災厄時を含めた各公民館の変化に関する分析(A～O施設一覧 一部抜粋)

施設	時期	利用・管理方法 (A～H公民館)			
		地震前	地震時	地震後(1～3年)	コロナ禍
(A)白藤ニュータウン	・利用のルール	利用料あり(しかし形のみ、実際無料で作ってもらっている)	利用料あり(しかし形のみ、実際無料で作ってもらっている)	利用料あり(しかし形のみ、実際無料で作ってもらっている)	利用料あり(しかし形のみ、実際無料で作ってもらっている)
	・鍵の管理	自治会長と公民館長 2名	自治会長と公民館長 2名	自治会長と公民館長 2名	自治会長と公民館長 2名
	・利用団体、活動頻度	・自治会系列活動(役員会等) 月1回 ・大規模地縁活動(夏祭り・発表会等) 年4回 ・小規模地縁活動(クラブ活動等) 週3回程度	・災害時の利用 利用なし ・公民館活動の再開 地震より数ヶ月後に活動再開	・自治会系列活動(役員会等) 月1回 ・大規模地縁活動(夏祭り・発表会等) 年4回 ・小規模地縁活動(クラブ活動等) 週3回程度	活動の自粛あり ・自治会系列 月1回～11月まで中止 ・大規模地縁活動 年3回～なし ・小規模地縁活動 週1回程度～11月まで中止
	・利用者の使い方	利用なし 自治会の催し物に月一回参加する程度	車にいた。公園で車中泊をした、その後力合西小学校の体育館に行って避難をした。体育館で一泊した後に家に戻った。	地震後に民衆委員になりました。民衆委員になってから鍵をもらって利用するようになった。	皆さんと触れ合える場が減ったと思う。あんまり外に出けなくなった。
(B)薄場公民館	・利用のルール	利用料あり	利用料あり	利用料あり	利用料あり
	・鍵の管理	自治会長・ その他自治役員 6名	自治会長・館長 その他自治役員6名	自治会長・館長 その他自治役員 6名	自治会長・館長 その他自治役員 6名
	・利用団体、活動頻度	・自治会系列活動(役員会等) 月1回 ・大規模地縁活動(夏祭り・発表会等) 年5回 ・小規模地縁活動(クラブ活動等) 週1回	・災害時の利用 避難場利用あり →避難者49名。 最大1ヶ月間公民館での避難生活をした。 ・公民館活動の再開 地震より3ヶ月後に活動再開	・自治会系列活動 月1回 ・大規模地縁活動 年5回 ・小規模地縁活動 週3回	活動の自粛はなし ・自治会系列 月1回 ・大規模地縁活動 年3回 ・小規模地縁活動 週4回
	・利用者の使い方	暇だったけん、することなけんならよかたいと思っていきはじめたいね。それまでは何しよるところがようしらんとたい。そしたらお友達できて楽しかと。	お友達が避難しているから安心できっと。ここに来た事が無い人との交流ができて心の支えになったたいね。あたらしから友達もできた。小学校が後から聞いたばってん、しばらくはここにあった。こっちのほうが安心できるけんね。	前よりも休みの後に、お喋りをする時間が増えと思うたい。病気の話とかちわ話した時が一番楽しか。	自己責任でも良かばってん、ここにきたか、楽しかもん。 みんなのおしゃべりが一番ストレス発散たい。そうでなか、ストレス溜まるばったたい。

(1) 各公民館の地域性に関する分析

各公民館の地域性に着目し、各地区の土地利用及び管理運営主体、利用団体数等を分析した。

(2) 災厄時を含めた各公民館の変化に関する分析

各公民館の利用方法やルール、行事のやり方等が災厄時を通してどのように変化したのかを分析した。

・多くの公民館では、コロナ禍において利用者の使用要望があった場合でも閉館を行う所が多い中、一部の地域公民館では、地域市民の為に公民館を開館している所が見られた。(表-2)

・公民館において日常的に活動していた事が結果的に災厄時の公民館の利用に繋がった実態が分かった。

5. おわりに

本研究では、災厄時を含めた公民館の利用調査を行い各公民館の災厄時における利用実態を明らかにした。災厄時に役立った事例や特徴的な事例を抽出し、その要因を明らかにしていく予定である。

参考論文

1) 内山淳子, 住民自治の進展における「参加」と「協働」

—伊賀市公民館活動の歴史的考察—, 佛教大学教育学部学会紀要, 第13号, 2014年

2) 牧野篤・新藤浩伸, 生涯学習と社会を記述する視点,

東京大学大学院教育研究科紀要, 第52巻, 2012年